祖父の手もとに人となつたのである。幾多の學者、書家、畫家を出した祖先の血を受けた先生は幼時より苦學力行、今日の榮譽を築き上げられたのであつて、文字通り立志傳中の人である。

先生の父は明治初年に米國貿易が開き初めると横濱へ本據を移し、原、茂木と並び稱される程手廣く生絲商を營むで居たが、年少氣鋭が禍をして失敗し、米國へ渡つて了つた。それで先生は母の里へ引取られて教育された。祖父(母方)といふのは元士族で學問もあり見識もあつて、よく家運再興について言ひ聞かされた。其時分は、繪は未だ玩弄品の範圍を出でないものであつたが、然し好きこそ物の上手で、小學時代から滿點以上で教師の舌を卷かしめてゐた。或る師匠について日本畫を學んだ事もあるが、子供心にも商賣で家を再興しようとして居たので、間もなく三越へ小店員として入り、商賣を見習ふことになつた。當時同店の圖案などで屢々賞を貰つたさうである。十八歳の時志を立て且つ父を慕つて渡米した。が先生の父は到底先生を經濟的に助けて、自由に勉強させる事が出來なかつたので、自分で働きながらニューヨークからワシントンへ辿りつき、辛酸を嘗めて、ハイスクールへ入學した。其時始めて先生について繪を習つたのである。或る時運動會開催を資金募集の爲めバザーをやつたことがあつた。先生は其際水彩畫によつて席畫をやつた所が、非常に好評を博し一人で何れのパーテーよりも成績よく非常な賣上になつた。

最近の川島理一郎先生

之が先生をして商賣への方向を轉じて、畫家への道を辿るに至らしめ、軈て畫壇に於ける今日の地位を得られた、最大の動機となつたのである。其時迄は其ハイスクールを卒業したら相當な上級の學校へ入つて經濟學を修め、何處までも商賣で身を立てる積りであつたのであるが、此成績を見て、自分の好きな道による方が早くもあるし、又自信も出來て來たのであつた。成績のいゝのは繪ばかりでなく、四年の課程を二年で卒へた程である事から推知するに難くない。それで意を決してワシントンのコーコランアカデミーへ入學した。校長メツサー氏といへば有名な畫家であるが、玆で初めて正式にデツサンから勉强した。明敏な先生はこの學校も四年の課程を二年で卒業して了ひ、尙毎年行はれるコンクールでは最優賞をかち得て居た。若し米國人であつたら、そのローマ賞で伊太利へ研究に派遣されるのであるが日本人故沙汰止みとなり、其代り卒業した時校長からニューヨークのアカデミー、オヴ、デザインで自由に研究する特權を與へられたので、引續き苦學しながら研究を怠らなかつた。

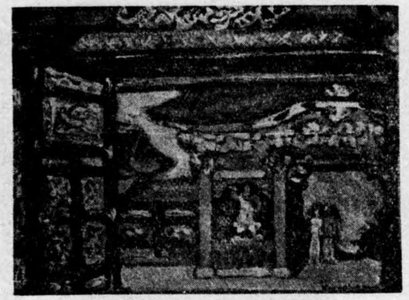
チエザ●デ●サルテ寺院　川島理一郎

先生の燃ゆるやうな研究心は、經濟上より受ける非常な生活苦と戰ひつゝ、遂に渡佛を決行せしめたのであつた。巴里へ着くと直ぐジュリアン、アカデミーへ入つて、ジョン、ポール、ローランスといふ巴里のアカデミシアンとしては現代唯一の大家について學んだ。

それから後の先生は尋常一樣の勉强ではなかつた。繪を描く爲めに先づ人間として醒めねばならないと氣付いた。藝術は人間の藝術で、フランスの藝術、日本の藝術ではない。從つて日本人、フランス人の藝術ではない。人間本然の胸から生れて來るものであるから、原始藝術から研究を始めようと考へた。かくして最初に氷河時代に於ける人類の殘した美術に着目して研究の手を染め、殆んど全歐を渡り歩いた。それよりエヂプト藝術、モロツコ、ギリシヤ藝術を味ひ、次いで十三世紀から起つた宗教藝術ゴシツクから最近の未來

派までも殘る所なく研鑽の旅を續けたのである。

さうした一九一二年(西暦)秋巴里風景二點をサロン・ドートンヌへ出品して入選し、日本人としての入選の先鞭を着けたのであつた。一九一四年世界大戰起り、當初佛軍利あらず、時の駐佛石井大使は在佛邦人に退去命令を下した。然し先生はかゝる國難の際、巴里の恩を受け乍ら徒らに退去すべきでないとして、交友の藤田嗣治氏と二人で兵役を志願した。が種々の事情で義勇衛生隊へ採用され、大いに活躍したが過激な勞務から不幸病を得て退き、療養捗々しくないのでアメリカへ渡つた。漸くにして大戰も終つたので再度渡佛を計畫し、一九一九年一先づ久し振りに日本へ歸つたのである。此年十二月資生堂で個人展覽會をやつたが、當時沈滯して居つた日本洋畫壇に非常なショックを與へた。翌年巴里へ出かけ、一九二二年再び戻つた。その翌年大震災に遭ひ三年間勉强して齎した創作全部烏有に歸して了つたので、一九二五年三度渡佛し、往復七ケ月の間に百點近くの製作を見せて大いに世人を驚かした。(福原信三、川島理一郎氏の事の文より參照)



日光夜叉門内　川島理一郎

先生が如何に稀に見る眞摯な藝術家であり、常に倦むことを知らぬ學徒であるかは、其後尙も再度の歐洲研學をされてゐることである。かくして歐米を訪ねること實に前後七回に及び、昭和五年スペインを中心に描いた廿數點の作品は万全を期して、東洋航路の優秀貨物船トリコロール號に託し、先生は陸路歸朝したのであつたが、不幸トリコロール號は印度洋上に於いて突如爆發し、二万噸の巨体と共に沈沒の憂き目に遭ひ、又々災厄に見舞はれたのであつた。

「(前略)私は、こゝ數年來、制作上に一つの研究的過程を持つてゐる。それは、曾て朝鮮の風物を描いた時に始まり、次いで台灣に於いて繼續した色彩表現の新しい研究であるが、今年は、この研究の過程を一層に進めたい意圖から、あの自然美と人工美との豐かに調和した日光の風物に表現の文題を求めた。(中略)凡そよき藝術を生み出さうとするには、對象たる主題が、眞實に自分のものにならなければならない。そして、自分の抱懷する理念によつて、その表現、即ち藝術的活動が、高い調和を齎らさねばならないと私は考へてゐる。主題と自己の生活とが、完全に調和された時、其表現は全我的なものとなる。これは余りにも平凡な事柄のやうであつて、然かもこれを具体化する事は常に容易なことではない。私が今年日光に題材を求めた所以は、この境地から、私の藝術の中に一つの新しい形式を創成したかつたからに外ならない。私は現代人だといふことをはつきり意識してゐる。そして現代人としての感覺は私の脈管に躍動してゐる。從つて私はどこまでも現代的な意識、又現代的な感覺を通じて、藝術形式を探求したい要求に驅られてゐる。時代的な根據を持ち、そして無理のない、然も飛躍的な表現、これが現在の私に課せられた藝術の負擔である。日光に於ける私の創作生活は、この負擔を清算する爲めの努力であり、苦鬪であつた。(中略)日本人であるがために、東洋的な仕事をしなければならぬといふ理由から、單なる懷古趣味に浸る事は、必ずしも日本人の生活を生かす事にはならない。吾々は東洋人であるが故に、吾々の生活感情には、自然その本然に持つ素質が表はれる。この素質を現代に生かして、吾々の生活感情を豐富にする事が、結局新しい仕事をする事になるのだと私は信じてゐる。かういふ現代的教養によつて調和された生活感情は、マチスやピカソに共通點を見出すばかりでなく、又大雅や、鐵齋にも通ずる事が出來るのである。(後略)」

之は昭和八年十一月東京に於いて催された先生の個展、日光風物展覽會目錄(作品掲載)に添へられた、先生の序文からの拔萃である。

作家としての先生の藝術態度は、健康にして正統なものだと言はざるを得ない。時流に超然として自己の所信に邁進して

行くところ、藝術に安固たる方針のある點が遙かに俗流を拔いてゐるのである。今日のやうな藝術の混亂期に作家が一つのメトードを確立して、その上に信念を置くといふことが既に困難なことであるが、先生は此點に於いて獨自異例の存在である。

先生の藝術は大体に於いてリアリズムである。其處には幾度かの歐洲滯在によるクラシツク的教養もあり、或は又、マチス、フリエスあたりのフオーブ的傾向も混淆してゐるのではあるが、その藝術的探求に自然の實相をキヤツチすることであつた。殊に色彩畫家としての先生の輝かしい色彩は、先生の叡智と感情の發露であつて、それが一所に固定せず常に流動し、發展してゐる所にその藝術的眞價があるのである。

「夜叉門內」は（昭和八年に描かれた極めて最近なもので、前記の日光風物展に出品されたものゝ一つである。）豪華を極めた日本建築の黑塗りの扉や、黃金裝飾が、內在的な美を以て、樹木の綠と快い諧和を保つてゐる。それは唯だ日光といふ歷史的名所が無味に再現、寫形されてゐるのではなくして、そのヴイヴイツドな描線の上に又色彩感の上に、現代畫家である先生の生活感情が生々と脈搏つてゐるのである。かうした畫因はやゝもすれば凡庸な懷古趣味に終る惧れあるにも關はらず、そこに今の世に生きる藝術家としての「個性的表現」が成されてゐる點に、先生の藝術生命の崇高な眞價が窺はれるであらう。

（荒城季夫　日光風物展批評）

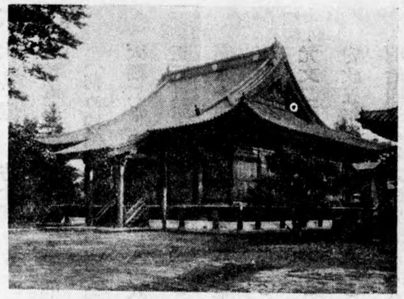
建　築

鑁阿寺

歷史古く、多くの史蹟に富む足利は從つて語るべき建築も相當有るが、美術的立場から見てその著名なものとして鑁阿寺を擧げることとする。

通稱大日の名を以て三つ兒にも知られてゐる金剛山鑁阿寺は、眞言宗豐山派に屬する特殊の本山であつて、本尊は、大日如來、藥師如來、千手觀音の三尊である。

足利陸奧判官義康の子、上總介義兼は文治五年（紀元一八四九）其の居館（大正十一年十一月、內務省より足利氏宅址として史蹟に指定さる）の境內に持佛堂一宇（後の大御堂）を建立した。史に曰く、蓋し義兼幼少の頃、父義康と共に、鳥羽法皇の御信任を得て離宮に出入せしより、法皇の持佛堂安樂壽院に倣ひて、草創せるものなるべしと。義兼は薙髮して「鑁阿」と號したので、鑁阿寺の稱之から起つたのである。遂ひに足利氏代々の氏寺として尊崇を厚うした。



背面より見たる大御堂

然し堂塔伽藍の莊麗を致して、規模を今日に傳へたのは、義兼の子左馬頭義氏である。義氏は父の素志をついで天福二年（四條天皇の代紀元一八九四）、大いに大御堂を修築し、次いで更に仁治二年（紀元一九〇一）には、南大門に坊監を置いて家臣をして之を守護せしめ、東に六字院・普賢院・東光院・西に金剛乘院・千手院・龍福院・安養院・北に淨土院・寶珠院・威德院・延命院の十二支院を建立し、之を一山地として、寺務一人、僧正に任じ、千手院を以て學頭職となしたのである。爾今當寺は由緒正しき足利氏の氏寺、否東國屈指の巨刹として、將軍、管領を始め數多の人々の崇敬、信仰を集め、畏くも勅願所たるの光榮をさへ忝うし、周到な保護を受けて、寺領の如き實に拾五万石余に達したといふ。その旺んなる推して知るべしである。故にその境內の如きも、淸淨結界の靈地として、歷代、雜人の橫行、牛馬の放入を嚴禁し、その威令よく行はれて現時に至つたのである。當寺が長き星霜、實に七百年を閱してよく開基當初の狀態を變ずることなく無事なる

を得たるは、寔に故無きに非らずである。明治四十一年八月内務省は告示第七十六號を以て、大御堂及び鐘樓を、特別保護建造物として指定した。

現存堂宇及びその修補年代を左に列擧し、而して後特建物に就いて特記して建築の稿を終ることゝする。

一、大御堂　方十間

文治五年(紀元一八四九年)開基義兼創立

(初め持佛堂と稱し、後、大御堂と稱する由、古文書に見ゆ)

天福二年(文暦元年紀元一八九四年)左馬頭義氏修理(棟札有り)

正應五年(紀元一九五二年)十一月讃岐守貞氏再修

應永十四年(紀元二〇六七年)四月、管領、左馬頭滿兼修理

天和二年(紀元二三四二年)一山學頭盛範修理

元文二年(紀元二三九七年)向拜修理

安政五年(紀元二五一八年)屋根葺替

明治四十一年(紀元二五六八年)八月内務省より特別保護建造物に編入せらる。

昭和九年(紀元二五九四年)大修理

二、一切經堂　方七間

建久七年(紀元一八五六年)開基義兼創立

應永十四年(紀元二〇六七年)管領左馬頭滿兼再修

寶永五年(紀元二三六八年)修理屋根葺替

昭和九年　大修理

三、多寶塔　方四間

建久七年(紀元一八五六年)開基義兼創立

元祿五年(紀元二三五二年)德川桂昌院再修

四、中御堂　方四間

天福二年四月　左馬頭義氏創立、母時姫の爲め建立すといふ。

文祿元年(紀元二二五二年)生實御所國朝再修

五、鐘樓　方三間

建久七年　開基義兼創立

明治四十一年八月大御堂と共に特別保護建造物に編入さる。

六、山門　間口五間、奥行三間(三間二面)

建久七年開基義兼創立

七、寶庫　方二間(あぜくら)

建久七年開基義兼創立

永亨四年(紀元二〇九二年)公文所奉行屋根葺替

八、御靈殿　間口三間半、奥行二間

足利大權現と稱し、七社神を祠り、一山の鎮守なりしが、明治四年(紀元二五三一年)九月、別殿の足利累代の像を合祀し、御靈殿と稱す。今の堂は德川家齊の寄進にかゝる再建築なり。

九、東西門(四脚門)　間口二間半、奥行一間半、創立當時の俤を存す。當時の武家の門として貴重なものである。

永享四年公文所奉行再修

十、時姫堂(姪子堂)

開基義兼の室北條時子の靈牌及び靈像を祀る。創立年代未詳、明治三十年(紀元二五五七年)再修。

十一、水　屋　間口二間、奥行一間半

明治二十二年(紀元二五四七年)三月、再建築。天井に田崎草雲筆の有名なる「八方にらみの龍」あり。

十二、御供所　間口十間、奥行五間

明治十二年(紀元二五三九年)の新築なり。

附　記

左馬頭義氏、境外十二坊を建立したが、其後盛衰あり、江戸時代末期に至つては一山維持の法がなく、寺址のみを存するものが多かつたので、明治三年(紀元二五三〇年)廢寺となり、今は其の址を留めず、民家が櫛比した。唯千手院址は、現在「足利幼稚園」の在る所であつて僅に當時の俤を想像するに過ぎない。

大御堂及び鐘樓は鎌倉時代に於ける建物として、而も現今遺存するもの極めて僅少なる、純然たる唐樣建築としてまことに注目すべきものである。抑々唐樣建築は、鎌倉時代に禪宗の輸入に伴つて、宋から傳來されたもので、純然たる大陸的な手法で、專ら禪宗伽藍に用ゐられた。當時東大寺再建の爲め、同樣宋より輸入された天竺樣(一名大佛殿樣)が全く普及されず(寧ろ歡迎されず)に終つたに對して唐樣は後代までも、その勢ひを維持し得たのである。これ等に對して從前より傳ひられて來た樣式を和樣と言ひ、この二者は我國建築樣式の骨子となつて、樣々の變化を伴ひ今日に及んでゐるのである。

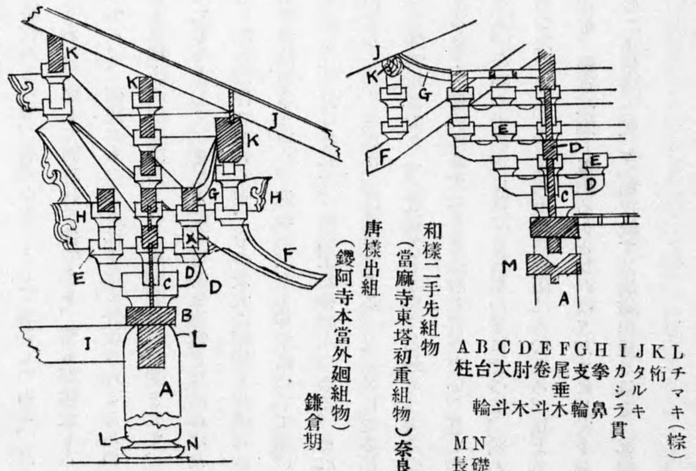
和樣と唐樣との相違を建築のみに就いて概略述べて見るならば(圖參照)先づその著しい例が斗拱(組物とも斗組(マス)とも言ふ、然して二者の區別は殆んど之に依ると言つていゝ)である。

1　肘木の末端、和樣は角があり、唐樣は圓弧である。

2　尾垂木、和樣は本末同大の幅員で末端垂直である。唐樣は末端急激な曲線と、著しき幅員の減じであり而して鳥舌を持つ。

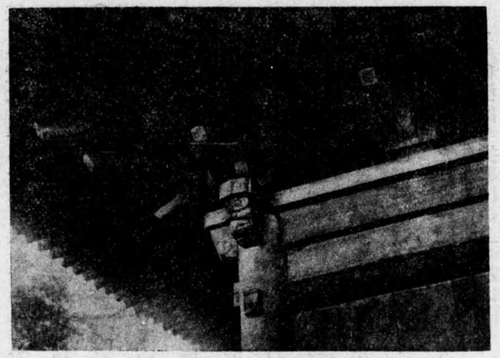
3　柱、和樣多く角柱なるに對して、唐樣は圓柱、然して上下に粽(ちまき)がある。又礎石と柱との間に圓形の礎盤を置き、且つ大斗と柱との間に臺輪があるのも唐樣の特徴である。

4、和樣は斗拱を柱の上のみに置き、斗拱間に間斗束若くは蟇股を用ふるが、唐樣は柱上と同じ組物を置くから、軒裏は組物で一杯になる。前者を「阿麻組」といひ、後者を「詰組」といふ。



和樣二手先組物
(當麻寺東塔初重組物)奈良期
唐樣出組
(鑑阿寺本當外廻組物)
鎌倉期

最も分り易い相違は以上のやうである。唐様建築として人口に膾炙してゐるのは、鎌倉の圓覺寺舍利殿である。他に永保寺開山堂(岐阜縣)、功山寺佛殿(山口縣)位のものである。何れも鎌倉時代のもので、唐様のものとして現存してゐる、良きものは極めて少ないのである。而して同時代の作であり、而も創建最も古き鑁阿寺は、美術的見地からは、前記のものよりは下位に評價されてゐるのである。當時權勢並びなき足利氏の創建にかゝり、東國著名の巨刹として、皇室の崇敬を忝うして來たものとして、まことに不可解な事實と言はねばならない。想ふに他にも種々なる條件もあらうが、その最大の原因を從前に於ける劣悪なる修理にあるのではあるまいか。例の一二を大御堂について擧げるなら、安政の修理の際に取り付けられた、無細工な枠肘木である。それから同じ修理によつて甚だしく鈍くされた「反り」である。又大斗に施された斗繰りの無神經なまでの無器用さである。建築美を左右する最も重要な部分であるだけに、影響するところ僅少に非ざることは論を俟たない。然し幸は遂に齎らされたのである。今回の大修理は賢明な當局の手によつて、殆んど創建當初の美に立ち戻つたのである。足利市民の幸福は大である。見よあの見事に修理成つて、老杉の梢上に堂々聳ゆる方五間本瓦葺の入母屋造を、懸軍長驅して迫るかと見れば又忽ちに馬首を廻らすにも似たる、豐かなそして深き軒の反りを、復舊全く成つて、軒の二重繁棰と美しく相反映する唐様出組斗拱を、各部の程よき比例は彌が上にも大御堂の壯重さを增し、壯觀此上もない。



大御堂細部

徳川時代に付けられた表向拜の繪様（建築の細部に花卉や動物の裝飾を彫り付けしもの）は簡素、壯重を旨として造られた大御堂本來の面目と、甚だ不調和であるので今回の大修理に當つて、最初の計畫では除く豫定であつたさうであるが、或る時代の修理の俤としてやはり今まで通り保存することになつたとかで、その儘になつた。

鐘樓は大御堂と共に特建物である。腰組（間斗束がある、唐様にして珍とせねばならぬ）を持つ本瓦葺石壇上に建てられた方三間、二重繁棰の小ぢんまりとした愛らしき建築である。修理年代表には無修理のやうになつてゐるがさうではない。第一あの裳階は後世附けたものであるし、組物にも隨處に修理の跡が見える。又修理年代も余り古くないと思はれる。

目下修理中である一切經堂は腐朽あまりに甚だしく、爲めに顧みられなかつたが、重層寶形造本瓦葺、下層方五間上層方三間、軒は上下共二重になつてゐるが上層は扇棰で、而も何れも半繁棰である。尚組物は上層に於て三手先組であるが下層は三斗組である。總体からいつて雄大な感じで相當に注目さるべき立派なものでないかと思はれる。

經堂は既に二度の修理を經て、尚且つ廢墟にも等しい荒れ様である。四圍常に童子等の遊場になつてゐる故でもあらうか。良き修理の後を鵠首するもの吾人のみであるまいと思ふ。

山門前の太鼓橋(俗稱)に天竺様手法の僅かながら見ゆるも面白く、前にも記せし如く東西の四脚門は鎌倉時代に於ける權勢の家、由緒の家にのみ許された様式のものであつて同種の遺構少なき中にまことに珍とすべきものと思ふ。

彫刻

孔子像

足利學校に今尚安置されてゐるものであり、注目さるべき彫刻の無い當市にとつて唯一の名品である。作者は不明である

が、製作年代は後奈良天皇の代天文三年から翌年八月迄に（足利氏十二代義晴の時）出來たものであることが胎内の墨銘によつて知ることが出來るのである。孔子は普通文宣王の姿に作られて從つて衣冠の扮裝であるのが多いのであるが、これは布衣の姿である。その爲めに、神農とか、維摩とか、老子とかに誤傳されて來たのであるが、同じく胎内の銘によつて、全く孔子像として、製作された事が明かになつたのである。

孔子像

聖堂内の正面中央の壇にこの孔子の坐像が置かれ、右方の壇には顏子と尊子、左方の壇には子思と孟子とが配置されてゐるのである。東山時代に於ける異彩ある彫刻として注目されてゐる。又國内神佛像多き中に異例の作として注意すべきものである。

古來此像は漢土傳來のものと宣傳されて來たものゝ如くである。江戸幕府時代に於て學校より其の筋に提出の書類中にも「聖像は、中華の傳來也」と書いた程であつた。故に歴代庠主中にも、木像胎内の銘文を知らざる者多く、第十七世庠主千溪は、安永八年（紀元二四三九年）八月五日に於ける聖像遷座式の祝詞中に

茲安二置于唐土之聖像一官二封于床朝之書籍一云々

と記し、第十八世青郊の遷座記中にも、

聖像者華人彫刻也然不レ知二何時代一云々

第十九世實巖の同記にも

安二置中華傳來之聖容一

とあり。その故に新樂定撰の「足利學校書籍目錄」の如きも聖廟所レ奉木像相傳云漢土之作

と記し、越智守弘の「下野國誌」また

傳云支那彫刻也小野篁置焉云々

と書し、支那傳來説殆んど定説であつたやうであるが、一体何人に依つて胎内墨銘が發見せられたかは、不明であるが、渡邊華山が其の文字を一見した事は「武野日記」の記事に明かであるから、華山の時代には既に之を知る者があつたのである。之を要するに明治の初めに僅々四十九字を判讀するに過ぎなかつたが、其後研究進み、田中義成博士の如きは百四十五文字を判讀し得るに至つたといふ。

それ等の中に

天文三年正月甲申之日初刻之明四年秋八月上丁忌畢矣云々

の銘文に依つて大体製作年代が明かになつた理けである。尚此像を以て、古畫燒失の代像として、新刻せるものならむと説く者あつたが、羅山の時、古畫像がなほ現存されてあつたことが判明し、其の妄説であることが知れた。

編輯後記

一、本輯上梓にあたり特に題字を賜りし本縣御出身の前侍從武官長陸軍大將奈良武次閣下　並に當場本縣知事閣下　序文を賜りし菊地學務部長殿に對して卷末ながら深甚の謝意を捧げる處であります。本號はこれらの題詞序文を卷頭にかざることが出來て一段の光彩を放つ次第である。

一、題簽　鄉土教授資料　の文字は本校々長黑澤正三郎先生に揮毫を御願ひしたものである。

一、表紙　足利之圖　及び　見返圖案　花瓶香爐は本校教諭吉田福一先生の揮毫になつたものである。花瓶香爐は靑磁で足利義滿將軍が鑁阿寺へ寄進したもので共に國寶である。

一、本號收載の資料記事は各該學科に於てそれぞれ生徒に實施調査させ擔當教師の責任執筆したものである。

調査は主として校外教授　休暇課題　鄉土展覽會等の折々に實施したのである。

一、國語漢文科は前輯詩文之部につゞいて本輯では碑文を採錄した　指導教師は同町輪夫先生大島伊勢松先生若月芳夫先生大菅文治先生等である　苦を拂ひ草を分けて碑石を手拓する奧床しさは東洋人のみがもつ風格である。

歷史科は主として傳記物を選び　生徒の士氣を鼓舞すべく殉難の勤王志士其他について上野一二先生に御願ひしてわかり易く面白く書いていたゞいた。

地理科は今までの鄉土誌に不充分であつたのを井上重一先生に精密に踏査してもらつてこの大論文を得たのである。

博物は新田勸先生が動植物の生態現象をあの輕妙な氣品のある筆致で起稿された。

理化は淺村菊次郎先生が主として執筆され　得難い材料によつて明確に書いてもらつたものである。特にこの篇の資料を提供された足利市當局並に東京報知機會社に對し深謝します。

圖畫科は足利の古建築及び美術について吉田福一先生が豐富な資料を犀利な筆に摘記されたものである。

一、紙面及び豫算の都合上折角の原稿を次號に割愛せざるを得ないものが相當あつて遺憾である　この點は各執筆者の諒恕を乞ふ。

一、埋草は足利に關係のある古人の詩歌と本校の先生方の俳句を撰びました。

一、本輯の發行に際して種々御高配を賜りし大方諸彥に對しては玆に厚く感謝の意を表するものである。

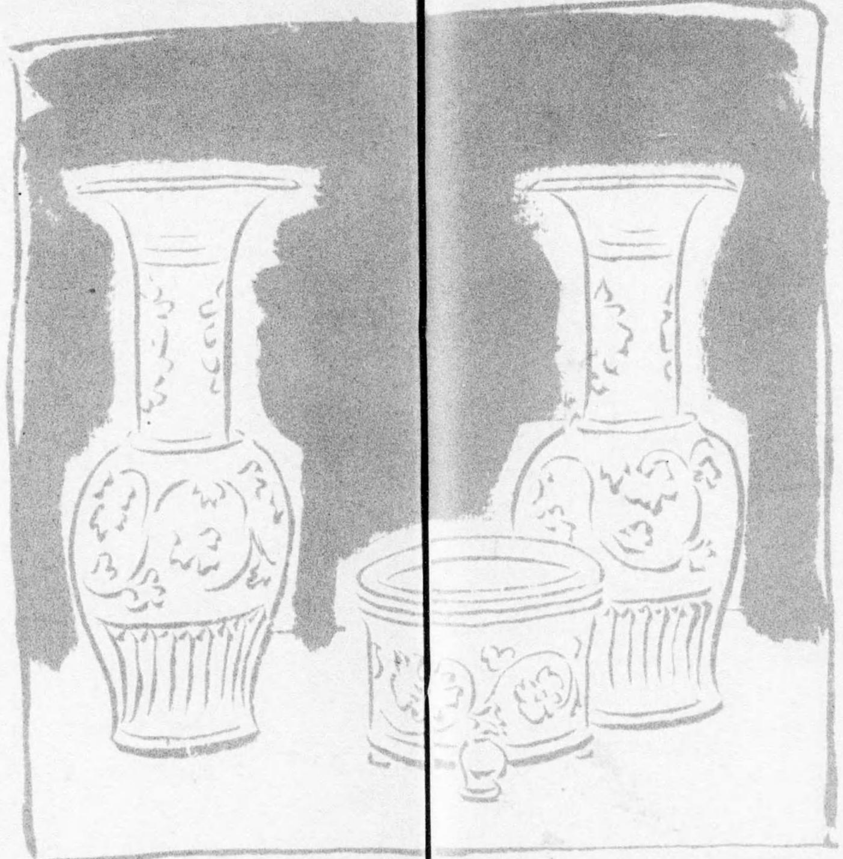
一、本輯は所謂鄉土資料といふ硬い氣分と鄉土讀本とも謂ふやうな軟い氣持とをまぜて編纂したつもりであるがいざ出來上つてみると勿論意に充たない點が多々あり又誤謬もあらう　この邊は第三輯を期して企畫する所存である。

（六・一〇・三〇・學藝部　大菅百花記）

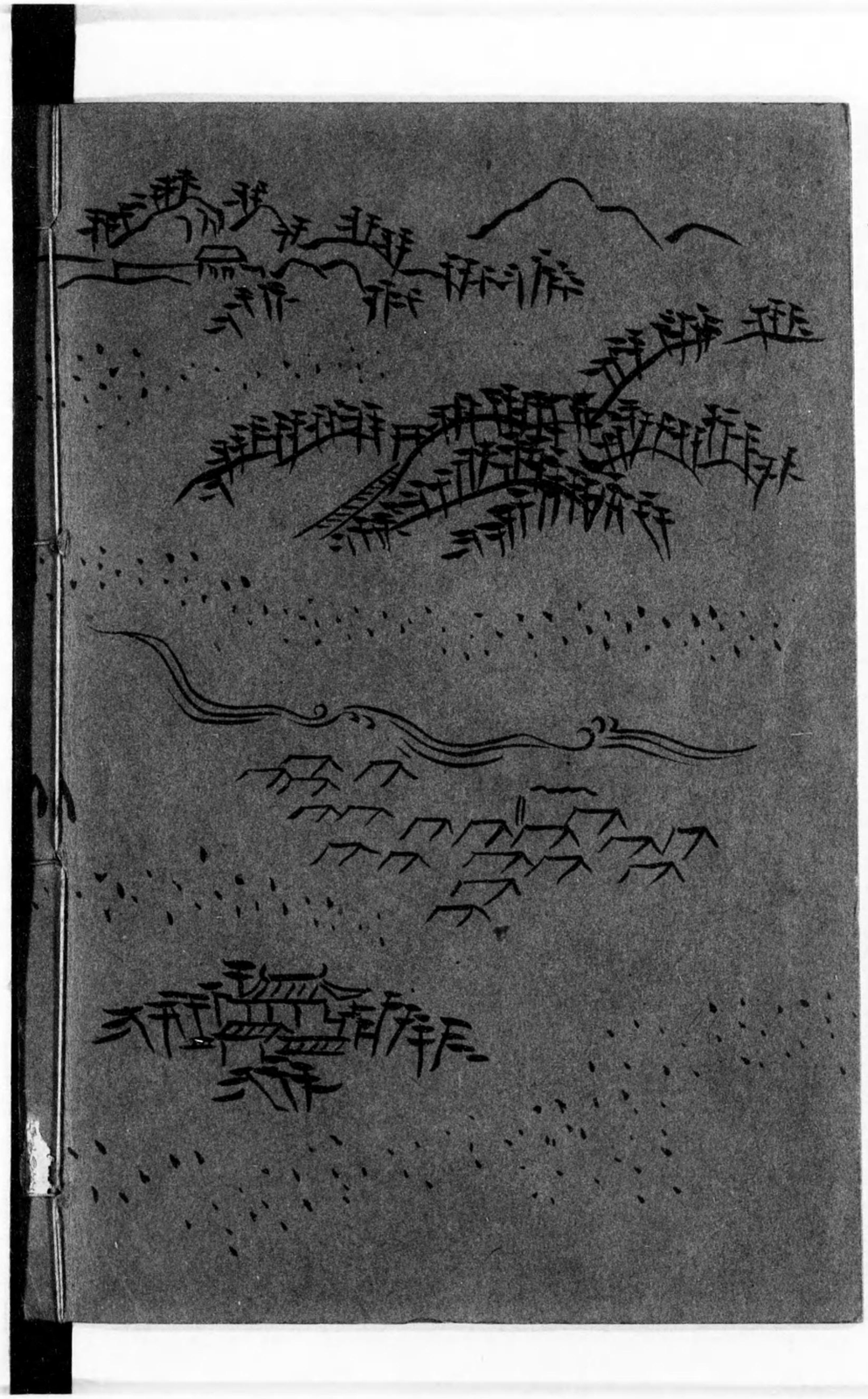
昭和九年十二月五日印刷
昭和九年十二月十日發行

【非賣品】

編輯兼發行者　栃木縣立足利中學校內　大菅文治
印刷者　宇都宮市杉原町三、二六四番地　關根義三
印刷所　宇都宮市杉原町三、二六四番地　下野印刷株式會社　電話（二二三九番）（二七二五番）
發行所　栃木縣立足利中學校　電話一七三番



青磁花瓶及香爐（国宝）

鑁阿寺藏　鍋一寫

終